

記念誌「相中相高八十年」より (創立期 その10)

文芸部事始め

文芸部の活動は大きく二つに分かれていた。

その第一は『学友会雑誌』の発行である。『学友会雑誌』は1906(明治39)年3月28日に創刊され、1943(昭和18)年発行の第40号まで刊行された。明治期には第10号まで編集され、1909年から3年間は各年2回発行している。各号平均200ページという大冊である。

もうひとつの活動は講談会の開催である。毎年春秋2回実施された。内容は、弁論大会というより、学芸発表会とでも言った方が適当に思われるもので、演説のほかには和文、漢文の暗誦、遠征談、旅行談、英文や英詩の暗誦、英語演説、英語の歌やハモニカ合奏など多彩である。英語演説には通訳がついたりしている。しかし、次第に弁論大会的要素が濃くなっていった。

第一回奥羽六県弁論大会で優勝

第二高等学校^(註1)が主催する第一回奥羽六県聯合学生弁論大会1911(明治44)年2月11日、二高講堂で開催された。

『河北新報』は、次のように伝えている。

今回始めて成立実施せられたるもの丈け、仙台市内各学校学生の之に対し非常なる興味を有したることは固より言ふ迄もなく、一般の人気の非常に引き立ちたるも、開会前一時間に早や満堂立錫の余地なしとまで報ぜられたるに依り知るべく、実に空前の盛況なりし。

弁論の選手は、一関中学、山形中学、古川中学、角田中学、会津中学、相馬中学の6名であった。相中の鈴木武志^(註2)は、「御土産物」という演題で、最初に登壇した。

『河北新報』の批評は「一身の将来に付相談すべく、若干の助力を請ふべく、唯一頼みになし置たる叔父なる武官が帰省せる時に、予に何等のお土産を与へず、相談しても全く答へ呉れざりし時は頗る不平なりしも、扱て汝の事は汝自ら為せとの教訓が此中にありし事を発見するに及んで非常に喜びたり。爾来予は自らの事を自ら為すべく期しつつあり云々と述べ、大に独立心を尚ぶべき所以を吹聴したるが、気焰の少々昂らざりしは遺憾とせられたり。」というものであった。

六選手の弁論が終了したあと、模範演説等があつてから、…講評と審査報告が行われ…、本校代表は、堂々第一位の榮譽に輝き数々の賞品を授与されたのである。

(註1) 東北大学の前身校の一つ

(註2) 磯部出身